

O1-020

小学5年生の生活状況と健康観から検討した生活習慣ならびに歯の現状

中山 真理¹⁾、田野 ルミ²⁾、植野 正之¹⁾埼玉県立大学 健康開発学科¹⁾、
国立保健医療科学院²⁾

【目的】口腔疾患は全身の健康と強い関連がある。子どもにおいては、歯と口の状態が生活環境に強い影響を受けることが報告されている。本研究では、自分のからだを主体性をもってまもりはじめる小学5年生の生活ならびに健康観から、生活習慣と歯の現状を検討し、口腔保健からの効果的な方策を考察する。

【方法】2019年埼玉県子どもの生活に関する調査において小学5年生の保護者とその子どもに対して質問紙調査を実施した。そのうち主観的暮らし観に回答した保護者とその子どもで健康観に回答した7207人を分析の対象とした。本研究は埼玉県立大学倫理委員会の承認を得ておこなっている。

【結果】保護者の暮らし観が「ゆとりある」「ふつう」「やや苦しい」「たいへん苦しい」別の子どもが「自分は健康だ」と思う割合は、70.7%、70.4%、67.4%、65.1%と低くなった。一日8時間以上睡眠をとる、毎日朝食を摂る、一日に歯を3回みがく習慣のある子どもの割合は、子どもの健康観が「自分は健康である」「ふつう」「健康ではない」と低下するにしたがい低くなった。「自分は健康である」と回答した子どもを保護者の暮らし観別にみると、8時間以上の睡眠をとっている者の割合は「ゆとりある」59.9%、「ふつう」59.5%、「やや苦しい」56.5%、「たいへん苦しい」51.5%と低くなった。う蝕なしと回答した子どもの割合においても、保護者の暮らし観にしたがい低くなった。

【考察】保護者の暮らし観にかかわらず、自分を健康だと思う子どものほうが、好ましい生活習慣、歯みがき習慣にあることが推察された。小学5年生の健康観には、自分の生活習慣が反映されていると考えられる。しかし自分を健康だと思っている、保護者の暮らし観が苦しい子どもでは好ましい生活習慣にある者の割合は低い。う蝕の状態に関してもその傾向が認められた。小学5年生の子どもの健康観には、自分のありようが包含されていることを理解し、それを大切に子どもが自分を主体的にまもることができる健康観へと育んでいく方策が、口腔保健には必要であると思われる。